

第 45 回世界体操競技選手権大会に参加して

金谷麻理子¹⁾

I はじめに

2014 年 10 月 3 日～12 日、南寧（中国）コワンシー・スポーツセンター・ジムナジウム（Guangxi Sports Centre Gymnasium）において、第 45 回世界体操競技選手権大会が開催された。

日本男子は、2012 年オリンピックロンドン大会の金メダリスト内村航平選手や、10 代にして世界チャンピオンとなった白井健三選手などがよく知られているように世界のトップレベルにある。一方女子は、近年メダルに手が届いていないこともあり男子に比べて注目度は低いが、2008 年オリンピック北京大会において団体総合で 5 位に入賞し、2009 年の世界選手権ロンドン大会では鶴見虹子選手が個人総合で銅メダルを獲得するなど、徐々に競技レベルが高まってきている。

このようななか、今大会の日本代表には本学の井上和佳奈（体育専門学群 1 年）が選出され、これによって私もコーチとして大会に参加する機会を得た。今回はコーチの立場から見た今大会について報告したい。

II 大会概要

今大会は、2016 年オリンピックリオデジャネイロ大会（以下、2016 リオ）の第一次予選であった。今大会における団体総合予選で 24 位までに入ると、2016 リオの出場権を争う 2015 年にグラスゴーで開催される世界体操選

手権大会に参加できるのである。

また、今大会は予選、団体総合決勝、個人総合決勝、種目別決勝の全競技が行われた。これによって、これまで最大規模であった 2003 年アナハイム大会の 585 名を超える 74 カ国 618 名の選手が参加した。なお、今大会の団体総合は、予選では各国 6 名がエントリーし、そのうち各種目 5 名が演技を行い、上位 4 名の得点がチーム得点となる「6-5-4 方式」と、決勝では各国 6 名エントリーで各種目 3 名演技、その 3 名全員の得点がチーム得点となる「6-3-3」方式がそれぞれ採用された。

III 代表選考会

1. 日本チームの方針

日本は、男子がかつて団体総合でオリンピック 5 連覇、世界選手権も含めると 10 連覇という輝かしい成績を上げていることもあり、団体総合を重視している。また、日本国内では一部の大会を除いてほぼすべての大会で、全選手が全種目演技を行うという競技方法を採用しており、オールラウンダーを育成するという基本方針をもっている。しかし、近年の国際大会では、種目別を重視するさまざまな競技方法が採用されたり、今大会の団体総合のように特定の種目だけに出場する選手、いわゆるスペシャリストが活躍できるシステムに変わってきている。このため日本でも近年の選手選考は、団体総合でよりよい成果をあげるためにも、個人総合のみ

1) 筑波大学体育系

で決定していた以前とは違い種目別の成績での選出も行われるようになった。

今大会の女子代表選手は、2014年5月に開催された第68回全日本体操競技選手権大会(以下、2014全日本個人)および6月に開催された第53回NHK杯体操(以下、2014NHK杯)の結果を合計した個人総合上位3名、そして7月に開催された第68回全日本体操競技種目別選手権大会(以下、2014全日本種目別)で各種目優勝者の中から3名、つまりオールラウンダー3名、スペシャリスト3名が選出された。補欠選手は、上記6選手を除く個人総合の上位者で、第17回アジア競技大会(2014仁川)の代表選手を兼ねるということになった。

2. 代表選考会での戦い

どのスポーツでも代表選考会ともなると異様な緊張感のため、その展開は奇想天外であり、結末もまたドラマティックである。今回の代表選考会となった3つの競技会も例外ではなく厳しいものであった。これらの大会に関する詳細なレポートは他に譲るとするが、その一端として2014NHK杯での出来事を紹介したい。

NHK杯は全日本個人の上位24名のみが出場できる大会で、毎年その年に開催される世界大会の代表選考会となる。一部の選手からは「オリンピックよりも緊張する」と言わしめる大会である。2014NHK杯も例年同様、特有の空気に包まれていた。そのようななか、上位1、2位の選手はさすがの実力で淡々と演技を行い高得点を重ねたが、代表選考の当落線上にいる選手たちには信じがたい失敗が続出したのである。特に、2014全日本個人で個人総合3位につけた選手は得意種目の平均台でまさかの3回落下という手痛いミス、過去に4度の世界の舞台を経験しているベテラン選手も最終種目のゆかで「お手つき」のミス、そして前年の世界大会において種目別ゆかで入賞した選手までもがその得意種目でミスをおかし、代表争いから脱落した。ちなみに、現在の体操競技の採点規則

では、落下や「お手つき」などの大過失は1.00の減点となる。

そこで個人総合選出選手の3人目のイスに滑り込んだのが本学の井上である。井上は、2013年第6回東アジア競技大会の代表には選出されているが、世界選手権、オリンピックの経験はない。また、各種目の得意不得意が比較的小さいオールラウンダー型の選手である。つまり、代表に選出されるとすれば個人総合の方が可能性が高く、NHK杯が一つの山場となっていた。そのようななかチャンスが巡ってきたのであるが、実は井上にもミスがなかったわけではない。出だしの跳馬では踏み切り板を踏み外し、跳躍技を空中で急遽変更せざるを得ず、平均台ではD難度のターンで回転の最中に大きくふらつきA難度に格下げされるなど、通常では起こりえない失敗をしていたのである。しかし、他の選手と異なる点があったとすれば、大過失を出さず中過失にとどめたことと、最終種目のゆかに向かうときに気持ちの余裕があったことだったと思う。

IV 強化合宿

代表選手が決定して以降、以下の日程で味の素ナショナルトレーニングセンター(以下、NTC)において、計4回(合計28日間)の強化合宿が行われた。

- ・第1回:7月12日~19日(8日間)
- ・第2回:8月6日~11日(6日間)(8/7, 8試合形式)
- ・第3回:8月25日~9月1日(8日間)(8/28, 29試合形式)
- ・第4回:9月18日~23日(6日間)(9/19, 22試合形式)

各合宿では、強化本部の方針にしたがって基礎技術の確認や女子特有の芸術性に関するトレーニング、審判を配置しての本番を想定した試合形式の練習などが行われた。NTCには、本番で使用する器具は設置されていなかった

が、国産よりも使用した感じがより近いと予想された海外製の器具で練習を行うように指示された。

また、合宿前半は2014仁川およびユースオリンピック代表選手との合同合宿であったため、日本のトップ選手が一堂に会しての練習はお互いにとってよい刺激になった。ただし、各合宿が行われたこの期間は所属で参加する各年齢カテゴリーの全国大会があったため、スケジュールが過密になり、代表と所属の両立で体調不良を崩した選手もいた。しかし、出発直前の第4回合宿では何とか全選手が揃い、試合形式の練習においても本番同様の演技をベストに近い状態で行うことができた。

V 現地にて

1. 日程

主な日程は表1の通りである(表1)。日本女子選手団は、監督1名、コーチ6名、選手6名、トレーナー1名、審判2名(後日合流)、計16名で構成された。

2. 生活および競技の環境

9月24日の早朝に日本を出発し、同日の夜に現地に着した。時差は1時間で日本とほぼ同時刻のため時差調整の必要はなかった。開催地の南寧は中国南部にあったため、気温が高く、真夏のようなであった。その一方で、体育館や宿舎、移動中の車内などは冷房がきまきすぎで、体調維持への配慮が必要であった。

宿舎は市街地に位置するホテルで、FIG役員や米国をはじめとするトップチームも同宿であった。会場は、南寧市郊外に位置する運動公園内にあるアリーナであった。宿舎と会場の移動は、今大会用にペイントされた専用シャトルバスを利用した。会場までは専用レーンが準備され、その道路脇には今大会のポスターが延々と並んでいた。アリーナには本会場(写真1)とサブ会場(写真2)があり、それ以外にも練習会場(写真3)が準備されていた。アリーナは夜になるとライブ会場さながらにライトアップされ、これもまた中国の好景気を反映しているようであった(写真4)。

表1 大会日程と主な活動および出来事

日付	大会日程	女子チームの主な活動	主な出来事
9月24日	出発	移動日	
9月25日		各自調整(一部練習)	
9月26日		各自調整(二部練習)	・アクシデント発生
9月27日		軽練習	
9月28日	監督会議	通し練習(二部練習)	
9月29日		各自調整(一部練習)	
9月30日		軽練習	・補欠選手合流
10月1日		ポディウム準備(一部練習)	
10月2日	ポディウムトレーニング	試合形式	
10月3日	男子団体予選(1日目)	各自調整(一部練習)	・予選出場者決定
10月4日	男子団体予選(2日目)	軽練習・応援	・日本男子、余裕の2位通過
10月5日	女子団体予選(1日目)	試合準備(一部練習)	
10月6日	女子団体予選(2日目)	試合	・日本女子6位で予選通過、決勝出場者決定
10月7日	男子団体決勝	各自調整(一部練習)・応援	・日本男子、中国に0.10及ばず2位
10月8日	女子団体決勝	試合	・日本女子8位
10月9日	男子個人総合決勝	各自調整(一部練習)・応援	・内村選手前人未踏の5連覇、田中選手銅メダル
10月10日	女子個人総合決勝	試合・応援	・寺本選手、笹田選手出場
10月11日	種目別決勝(前半)	観光・応援	・男子ゆか、白井選手悔しい銀メダル
10月12日	種目別決勝(後半)・フェアウェルパーティ	試合・応援	・女子平均台、寺本選手惜しい4位
10月13日	帰国	移動日	

3. 練習期間（9/25～10/2）について

現地に到着した翌日、9月25日から練習が始まった。この間の練習の主な目的は、現地の器具に慣れることと、10月2日に行われるポディウムトレーニングで良い演技が行えるように準備することであった。ポディウムトレーニングとは、本会場で本番同様の時間帯にチームごとに練習する機会であり、審判員の事前研修の場ともなる。採点競技という特性上この場でしっかりとした演技を行い、審判員にいい印象を与えることが必要である。

器具はTAISHAN社製であった。会場入り後すぐは、新品が設置されていたために、ゆかや踏み切り板が硬い、あるいは段違い平行棒のバーが滑りやすいなど多少使いにくいところもあった。しかし、各国の選手が使用しているうちに次第に使いやすくなり、事前合宿で海外製の器具を使用していたことも功を奏して選手は順調に適應していった。

ところが練習が始まって2日後、日本チームにアクシデントが発生した。この日、体育

館はまだ人が少なく、静かな状況で選手たちが各自練習を行っていた。そのようななか、体育館内に「パキッ」という音が響き渡った。一人の選手が手を骨折してしまったのである。怪我の状態が明らかになり、競技が不可能と判断されるとすぐに選手交代の手続きがとられることになった。すでに述べたように、補欠選手は2014仁川に出場しており、韓国から日本へ帰国したその日にこの知らせを聞いたとのことであった。大きな試合が終わったばかりということもあり、補欠選手の体調が心配された。また、これによって日本チームは団体総合の戦略を変更せざるを得なくなった。怪我をした選手はスペシャリストとして選考された選手で、一方補欠選手は個人総合で選出された選手であったため、チーム得点に貢献する種目が異なっていたからである。さらに、事前合宿において補欠選手を組み入れた練習を一度も行っていなかったため、新しい演技順への対応など選手たちの適應能力が試される状況になった。

10月2日のポディウムトレーニングでは、



写真1 本会場

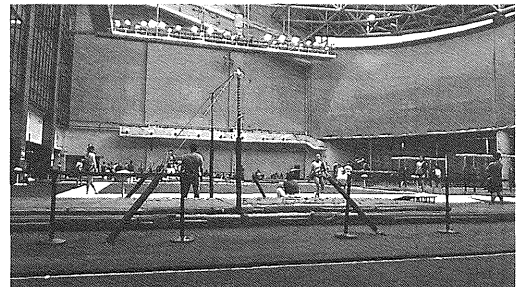


写真2 サブ会場



写真3 練習会場

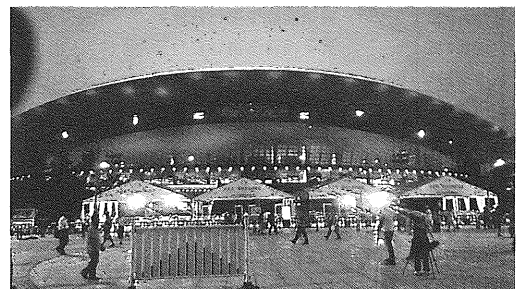


写真4 アリーナ正面

大会当日と同様のスケジュールで行動し、補欠選手を組み込んだ演技順で練習を行った。選手たちは、はじめての会場、はじめての演技順であったが、その状況に動じることなくおおよそ予定通りの練習を行った。補欠選手も心配された体調不良もなく、はじめてとはいえ本番前にシミュレーションできたことは不幸中の幸いであったと言える。

この期間を振り返ってみると、この日数は器具に慣れるという点では有効だったと考えられる。しかし、コンディショニングという点では少し難しい面もあった。それは、国内で一度仕上げたコンディションを、この間どのようにコントロールするかということである。ポディウムトレーニングまで8日間、もっと言えば大会初日まで12日間という日数を考えると、当然のことながら好不調の波はあらわれる。落ち着いて考えれば立て直す時間が十分にあることにも気づくが、経験の浅い選手や指導者にとっては些細な不調の兆候が焦りにつながり、さらなる不調を招いてしまうのである。しかしながらこの問題を解決するには、経験を積むしかない。

4. 競技期間 (10/3 ~ 10/12) について

(1) 団体総合予選

ポディウムトレーニングの翌日からいよいよ競技が始まった。予選は男女ともに2日間ずつ行われた。したがって、女子予選は競技3日目から始まった。事前の情報では、米国、ロシア、ルーマニア、中国の4強と地元オリンピックを経験したイギリスは予選通過の可能性が高いとみられていた。ただし、6位以下については実力が拮抗しており、前回オリンピックで決勝に進んだカナダ、イタリア、そして日本と予選通過を争ったドイツ、オーストラリア、フランス、2016リオに向けて強化が進む中南米のブラジル、メキシコなどが日本のライバルとしてあげられた。いずれにしても、ミスなく予定の演技を行ったチームが上位に進出するとの予想であった。

女子予選1日目、カナダはスタート種目で怪我人が出てしまいリズムに乗り切れず、ポディウムトレーニングでは精細を欠いていたロシアは伝統国の意地を見せ、多少ミスはあったもののしっかりとまとめてきた。期待されたブラジルは細かいミスが響いて思うように得点が伸ばせず、米国は段違い平行棒で多少のミスはしたが、難度、出来映え共に圧倒的な強さを見せて首位に立った。

2日目、いよいよ日本が出場する日となった。ドイツはエースの怪我と、落下が命取りとなる段違い平行棒と平均台の2種目での大過失が響き、得点が伸ばせなかった。イタリアは、細かいミスはでたもののダイナミックな演技で、大過失を数個でおさめ日本を上回った。イギリスはミスは出たが、エースが大事なところでしっかりと演技を行った。ルーマニアは伝統的に比較的苦手になっている段違い平行棒で得点のばせず苦戦したが、やはりとるところでしっかりと得点を稼ぎ予選を通過した。そのようななか、日本は段違い平行棒と平均台の出だし2種目の出来が勝負の行方を握っていたが、ここで各選手が十分に実力を発揮し、良い波に乗ることができた。心配された選手交代の影響もなく、ゆかで唯一大過失があったが、抜群の安定感と丁寧な技さばきでベストに近い得点を獲得した。

以上の結果により、日本は予選を6位で通過し、決勝へとコマを進めた。また全種目出場した2選手が順当に個人総合決勝に進出し、種目別平均台決勝にも1名の選手が出場することになった。本学の井上は、開始2種目のトップバッターと最終種目の最終演技者というプレッシャーがかかる大役を任されたが、大舞台に臆することなく予定通りの演技を行い、チームの決勝進出に貢献した。

(2) 団体総合決勝

日本男子が0.10という僅差で優勝を逃した翌日、女子団体総合決勝が行われた。前日に中

となった BILES 選手は 3 種目、ROSS 選手は 4 種目、以下ルーマニアの IORDACHE 選手とロシアの MUSTAFINA 選手は 4 種目に出場していた。この点については、選手の選考および起用に関連する重要な内容なので慎重な検討が必要であるが、オールラウンダーとスペシャリストをどのようにどのように選出し、どのような演技順で起用するかは結果に大きく影響すると考えられる。

日本は結果的に 8 位となってしまったが、現地入りしてからの選手交代というアクシデントにも動じることなく、予選・決勝を通して最低限のミスで演技をやりきったということは評価に値する。また、安定した演技に加え、一つ一つの技を丁寧に実施していた日本の技さばきは、米国を代表とするパワフルな演技とはまた違った輝きを放っており、今後の強化方針を考える際のカギになると考えられる。さらに今回は 6 名のうち 5 名が 10 代、4 名が初めての世界での団体総合、さらにそのうち 2 名が初代表というフレッシュなメンバーであった。そのような選手たちが堂々と世界で戦えたことは日本全体の強さであると受け止めてよいであろう。一方で、現時点では D スコアの平均点が各国に比べて低いことは明らかであるため、高難度の技や高度な組み合わせを演技に組み入れることが今後の課題として挙げられる。

VI おわりに

最後に、全体を通して感じたことを記してお

きたい。それは、チームというものをどのように捉えるかということと、想定外の出来事とどのように向き合うかということである。

体操競技は個人競技である。そして、日本における体操競技選手の強化は、その中核を各所属が担っている。つまり、普段はライバルであり、生まれ育った環境が異なる選手たちが、代表選手になることによってチームメイトになるのである。とはいえ球技などのチームスポーツのように息を合わせてプレーをしなければゲームが成り立たないということはない。また、仲間を思いやって自分がミスしてしまっただけの本末転倒である。つまり、体操競技において、特に代表チームでは何をもってチームワークということかを十分に考え、チーム内で共通理解を深めておくことが必要である。

また、今回は競技以外の場面でも大小さまざまな出来事に遭遇した。例えば、報道にもあったように、男子個人総合決勝の表彰式において国歌の演奏が途中で終わってしまうということがあった。この国歌の件は、ハプニングではなく全ての国歌を 45 秒で終了させるという式典運営上の決まり事だったようであるが、それにしてもその瞬間現場では異様な空気が流れた。しかし、このような場面も避けて通ることはできない。世界の舞台で活躍していくためには選手、指導者共々どのような状況におかれても自分のペースを守り続けられるタフさと、それにもとづく揺るがない技術を身につけることが不可欠なのである。